

## 原 著

# 音楽感覚形成における「こもりうた」の音楽教育的機能について

加藤 晴子 (兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科) 奥 忍 (岡山大学教育学部)

本研究は、音楽感覚形成における「こもりうた」の機能について検討したものである。「こもりうた」は、人の成長の過程で最も早い時期に行われる音楽的コミュニケーション活動の一つであると共に、子どもと養育者の間に相互に行われる最も親密なコミュニケーション活動である。音楽的コミュニケーションは、本来、音楽的活動が成立する上で不可欠なものである。音楽的発達の視点からみると、このような「こもりうた」を媒介とした音楽的コミュニケーションは、個々人の音楽感覚の形成、すなわち、音楽的母語の形成に大きな影響を与えるものであるといえる。音楽の学習や理解は、その上に形成されるものである。したがって、音楽学習においては、子どものもつ固有の音楽感覚を認識すると共に、それに基づいた学習計画が作成・実践されることが必要である。

キーワード：音楽感覚形成、音楽的コミュニケーション、音楽的母語、「こもりうた」、養育者と乳児の相互関係

## はじめに

我々は、音楽に対して様々な受けとめ方をしている。同じ音楽を聞いていても、一人ひとりが自分のもっている音楽感覚で音楽を受けとめているのである。このような個人のもつ音楽感覚は、ある文化の中で育った者が自然に身につけている、その人固有の音楽感覚といえる。ただし、その感覚については、音楽を受けとめる者自身が、ほとんど自覚していないことから、その感覚はいわば無自覚的な音楽感覚といえよう。

また、音楽のもつ価値あるいは価値観についても、それがすべての人に共通するような普遍的なものではないということは、現在では共通認識となっている。このようなことから、音楽の学習を行うにあたっては、学習者自身が、自分のもつ音楽感覚を認識することが必要であり、一方指導者は、音楽感覚を認識した上で学習プランを立てることが必要ではないだろうか。

では、このような音楽感覚はどのようにして形成されていくのだろうか。発達の視点からみて、注目すべきものは、人の成長過程の最も早い時期に与えられる音楽的刺激とその影響である。その一つに「こもりうた」が挙げられる。「こもりうた」は、人の成長の過程の最も早い時期に繰り返し与えられる音楽的働きかけであること、養育者自身の声によって歌いかけられるものであること等から、子どもの音楽感覚の形成に与える影響は大きいと考える。

そこで本研究は「こもりうた」を取り上げ、子どもの固有の音楽感覚形成における「こもりうた」の果たす役割について考察を行う。

## I. 音楽的発達の視点からみた音楽学習や理解の形成

子どもは、学校音楽教育のような意図的な音楽教育が始まる以前に、その子ども固有の音楽感覚を身につけている。したがって、意図的な音楽の学習や理解は、その音楽感覚を基盤として行われる。ここでは、子どものもつ固有の音楽感覚が形成される基盤と、音楽学習や理解の形成との関係について考えてみたい。

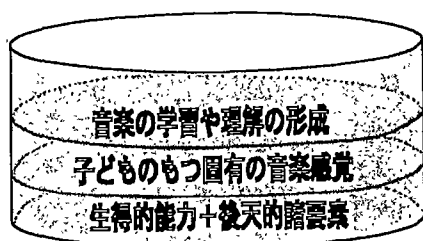
音楽感覚が形成される基盤は、人がもつ生得的な能力、すなわち、音や響きを知覚する能力やコミュニケーション能力に、生活環境や音楽的刺激といった後天的な諸要素が加わることによって構築される。ここでいう生活環境とは、言語、生活習慣、あるいは様々な物や事象に対する価値観等、子どもが日常的に関わるものであり、それらはすべてその子どもの文化的背景である。その文化的背景となっている多様な要素は、養育者と子どもの相互の関わりを通して、子どもに様々な繰り返し働きかけられる。音楽的刺激についても同様に、養育者と子どもの相互の関わりを通して、子どもに様々な繰り返し働きかけられるのである。

ここで注目すべきことは、子どもに対する様々な

働きかけが、子どもと養育者との相互関わりを通して行われるという点である。そのため、養育者と子どもの間で交わされる音楽的コミュニケーション（注1）の内容と方法、すなわち、成長の過程において、どのような内容がどのような音楽的方法によってコミュニケーションされるのかということが問題となる。また、子どもの能力の発達、それが一人ひとりの子ども自身の発達である一方で、長いスパンでみれば、時代をこえて様々な文化的行為（文化的背景、音楽的行為に関わる様々な行為）が世代間伝達されている。世代間に伝達される文化的行為は、子どものもつ固有の音楽感覚の形成に無意識の内に影響を与えているといえる。したがって、後天的諸要素の内容とそのあり方は、その子どもの固有の音楽感覚の形成に大きく影響を与えるといえよう。

音楽の学習や理解は、上記に示したような生得的な要素と後天的諸要素の統合によって構築されてきた音楽感覚の上に形成されていくのである（図1参照）。したがって、子どもの音楽感覚の形成を考える際には、このような関係を明確に認識しておくことが必要といえよう。

図1 音楽の学習や理解の形成



## II. 人の生得的諸能力とその発達

近年、発達心理学の分野では、人は生得的に社会的な諸能力をもっている、ということが大きく注目されている。発達心理学者のトレヴァーセン（Trevarthen）は、次のように述べている。「人類は人に対して人間らしく反応したり、自らを表現したりするメカニズムをもっており、そのメカニズムが脳のどの部位の働きによるかはわからないにしても、それが模倣や訓練の結果ではなく、そのほとんどが誕生以前から脳に組み込まれたものであることはまず間違いないところである。」（Trevarthen：1979，鯨岡訳：1989 69）

人が生得的にもつ社会的諸能力の中でも、音楽活動に直接的に関わる主な能力は、音や響きを知覚す

る能力とコミュニケーション能力である。音や響きを知覚する能力については次のようにいわれている。

「生まれて間もない乳児でも、人の声の知覚には鋭いものがある」（Trevarthen：1979，鯨岡訳：1989 85）

「個々の母親の独自の声や話し方も、早期に認知され、偏好される」（M.Mills&E.Melhuish：1974，123～124）今日では、早期乳児期の音楽知覚能力については、かなりの部分が明らかにされているのである。

コミュニケーション能力については、「明らかに乳児には、母親からくる種々の入力刺激を感知したりする能力が備わっている。実際、母親がすることへの応答が適切な形になっているので、乳児自身はコミュニケーションのやりとりを最初からかなりの程度調節することができる。（Trevarthen：1979，鯨岡訳：1989 87）」といわれている。また、コンドン（Condon）は、「生まれたばかりの乳児が大人の聞き手とほとんど同様に大人の会話の構造に呼应している（Condon：1979，鯨岡訳：1989 249）。」と述べている。このように、早期乳児期のコミュニケーション能力は、音楽的活動に関わるに足るものといえる。

このような音や響きを知覚する能力やコミュニケーション能力は、その子ども固有の生活環境や音楽的刺激等の後天的な要素に応じて発展していくと考えられる。これが、その子ども固有の音楽感覚の形成基盤となるといえる。言い換えれば、子どもが受ける様々な刺激は、広い意味での音楽学習と捉えることができる。

一般に、音楽学習は大きく2つに整理される。その一つは無意図的学習である。乳児期の子どもと養育者の場合、無意図的学習は両者の相互の関わりの中で、音楽的コミュニケーションを通して行われるものである。例えば、子どもに対する呼びかけ、言葉かけ、「こもりうた」を歌う等が挙げられる。それに対して、もう一つの学習は意図的学習である。意図的学習は、子どもに音楽的能力をつけさせることを目的としたものである。例えば、毎日、一定の時間、予め決められた音楽を聴かせるといったものが挙げられる。意図的学習では、子どもの感情的な発信や興味といったこととは無関係に、大人から子どもに、いわば一方的に音楽的刺激が与えられるという点に特徴がある。子どもに高度な音楽感覚を育成するために、養育者自身が歌うのではなく、CD等による「こもりうた」を繰り返し聞かせるという例がこれにあたる。発達の視点からみると、このような意図的学習は、コミュニケーション活動の重要

性に対する認識に欠けている点で問題があるといえよう。問題は、音楽的刺激が、子どもと養育者の相互関係の中で与えられるのではないこと、子どもの反応や、その時々状態に関わらず、一方向的に音楽的刺激が与えられることにある。

トレヴァーセンが「早期乳児期のコミュニケーション活動が非常に未熟なものであるのは言うまでもないが、その活動は大変活発で、コミュニケーション過程を担い、認知諸過程の発達基礎となるに充分である。」(Trevarthen: 1979, 鯨岡訳: 1989 69)と述べているように、一般に、子どもと養育者のコミュニケーション活動は非常に重要なものである。それは、音楽活動においても同様である。例えば、養育者が「チョチチョチアワワ」のような遊ばせ歌を歌い演じたり、子どもの手をとって一緒に演じたりして子どもを喜ばせることがある。乳児はまだ手足の運動機能が未発達のため、充分な動きはできないとしても、表情と同時に、歌に合わせて手足を動かそうとしたり、口を少し動かしたりする。このような反応は、月齢に応じて、経験を重ねていくことによって次第に活発なものとなっていく。その際に養育者は、子どもの意図を満たすように振る舞ったり、子どもが実際に行動できるようにその場の状況を調節して、子どもの活動を組み立てようとする。クラーク(Clark)は「養育者は養育者自身が解釈したように、子どもが実際に行動できるように、事物を調節する。そのような援助を通して活動を遂行した子どもは、自分一人で実行できる身体的な能力を持つ以前に、いろいろなことをしようと意図することができるようになる。社会的行動は個体的行動に先行するのである。」(クラーク: 1978, 鯨岡訳: 1989 9)と述べている。

このようなことから、子どもの音楽感覚の形成に関しては、子どもと養育者が相互に反応しあいながら行われる音楽的活動に注目すべきではないかと考える。そのような活動の一つが「こもりうた」を歌うことである。

ここで、子どもに対する音楽的働きかけの面から「こもりうた」をみてみよう。「こもりうた」には、以下のような特徴がみられる。

- ① 養育者自身の声による歌いかけがされること
- ② 人の成長過程の最も早い時期に、繰り返し受ける音楽的働きかけであること
- ③ 子どもの、その時々状況に応じた歌い方がされること

#### ④ 子どもと養育者の相互関係の中で与えられる音楽的働きかけであること

このような特徴を通して、最も注目されるのは、「こもりうた」を媒介として、子どもと養育者の間に相互の音楽的コミュニケーションが活発に行われるようになるということである。このプロセスでは、養育者と子どもの間でそれぞれの意図が相互に理解されるようになる。このことは、以後の音楽的コミュニケーションの発達に欠かせない基本的条件ともいえよう。

このような音楽的働きかけの結果として次のようなことが生じる。第1に、子どもの音楽的コミュニケーション能力が高まること、第2に、無意識の内に、子どもは「こもりうた」のもつ旋律やリズムなどの音楽的要素を知覚し、それに対して反応を繰り返すこと、である。乳児が知覚し反応した音楽的要素は、成長・発達の過程で次第に内在化され、同化されていくのである。このことが、一人ひとりの子ども固有の音楽感覚の形成、つまり、音楽的母語(注2)の形成につながるといえよう。

### Ⅲ. 子どもに対する養育者の言葉かけと音楽的要素

「こもりうた」は、元々、そのほとんどが言葉から生まれたものである。したがって、その元となっている言葉は、養育者が子どもに対して日常的に行っている言葉かけと密接な関係をもっている。

このことから、養育者の子どもに対する言葉かけにみられる特徴と、そこにみられる音楽的な様相について着目した。そこで、養育者が子どもに対して日常的にどのような言葉かけを行っているか、その様子を観察することにした。観察の対象者は、Sちゃん(女兒・満5ヶ月半)と母親である。今回の観察では、母親が子どもをあやす際に、Sちゃんの好きなかたつむりの指人形や女子の人形を動かしながら、Sちゃんに頻繁に言葉かけをしている様子がみられた。そこで発せられた言葉かけとそれに対する子どもの反応、母親の再発信の様子を整理すると表1のようになる。

表1 母親の言葉かけとそれに対する子どもの反応

02.10.16 Sちゃん 満5ヶ月半

母親の言葉かけ	Sちゃんの反応
「でんでんむしちゃんしょうか、咲樹ちゃん」(写真1参照) —かたつむりの指人形を咲樹ちゃんに近づけて— 「チュイチュイ」「チュチュチュ チュイチュイ」 「ヌヌヌ」 (言葉にあわせて、指人形を動かす) (言葉自体には意味がない、何回か繰り返す) 「ヌヌー」「ヌー」「ヌー」「ヌヌー」 「たちゅけて、たちゅけて、言いよるで」* 「ヌヌー」「ヌー」「ヌー」「ヌヌー」	かたつむりの指人形に興味を示す 指人形を取ろうとする 「ウーウー」「ウーウー」(断続的に声)  「アーアー」「アーアー」(呼応したかのように)
—咲樹ちゃんが「ぶんぶん」をしたので— 「突然ぶんぶんだったん? 咲樹ちゃん」(写真2参照)	両手を広げて身体をそらせる(「ぶんぶん」の姿勢)
—指人形を取られてしまって— 「あーっ、咲樹ちゃーん」「咲樹ちゃんがののちゃんをー」 「ののちゃんが一、咲樹ちゃん、ヨーグルトちゃんなっちゃったよ、ののちゃんが」  「ペロしちゃったの」	指人形を母親の指から取る  指人形を口に入れたりして、いじる 「ウーウー」「ウーウー」
—女子の人形を出して子どもの前に置いて— 「チュチュ チュチュ」 「ムームー ムームー」	指人形を手から離す 「アーヴー」「アーヴー」(断続的に声)  女子の人形にあまり興味を示さない
—泣き出したので、驚いたように— 「どーったんどーったん、咲樹ちゃん」** 「ウーウー」	—気に入らないためか大きな声で泣き出す—

\*: 助けて、助けて、言っているよ、の意

\*\*: どうしたの、どうしたの、の意

写真1



母親の声は、大人同士の日常の会話で話される場合よりもピッチが高い。言葉かけでは、「チュイチュイ」や「ヌヌヌ」のような、それ自体は意味を持たないような短い音節群の繰り返し、「でんでんむしちゃんしょうか」や「突然ぶんぶんだったん?」のような短いセンテンス、「どーったんどーったん」のような言葉の抑揚の強調などがみられた。母親は、

写真2

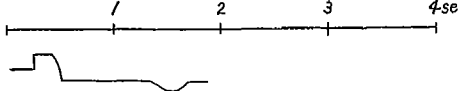
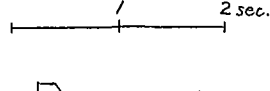
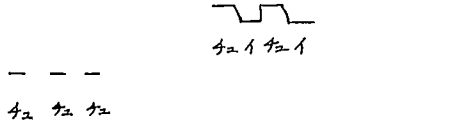

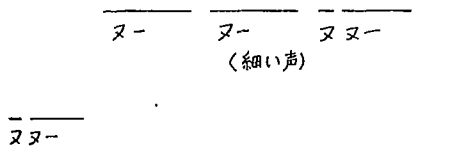

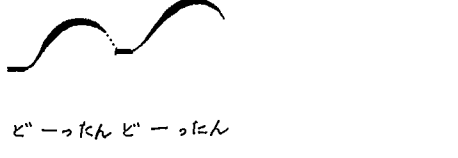
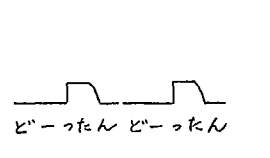


何かにつけ頻繁に言葉かけをしており、それらは、その時々状況や、子どもの反応に応じたものとなっている。

次に、母親の行った言葉かけにみられた音楽的様相について考えてみよう。表2は、母親の行った言葉かけのうちのいくつかについて、音の高低の様相を上下の関係で、リズムを水平の長さの関係で、特

に強められた部分については太線を用いて表したも 参照して示す。  
のである。また、一般的な大人同士の会話の様相を

表2 母親の言葉かけにみられる音楽的様相

母親の行った言葉かけ	音楽的様相	大人同士の一般的会話の場合
でんでんむしちゃんしょうか	 でんでんむしちゃんしょうか	 でんでんむしちゃんしょうか
チュチュチュ チュイチュイ	 チュ チュ チュ チュイ チュイ	
ヌヌー ヌー ヌー ヌヌー	 ヌー ヌー ヌー ヌヌー (細い声)	
どーったんどーったん	 どーったん どーったん	 どーったん どーったん

このように母親の言葉かけからは、日常会話での言葉がもつ響きとは異なる旋律風な響きや律動感が感じられる。これらは母親の言葉かけにみられる音楽的要素といえる。また、これらの音楽的要素は、日本の伝統的な「こもりうた」のもつ特徴と共通している。日本の伝統的な「こもりうた」にみられる一般的な特徴は、以下のようなものである。

1. 基本的に1音節、1音の構造であり、旋律進行は拍節的であること
2. 比較的、言葉の支配が強いこと（旋律は、言葉のもつ抑揚やアクセントに従う）
3. 言葉のもつリズムとは別の律動感の感じられる部分（ただし技巧的なものではない）のあること
4. 旋律を構成する音数が少なく、音域も比較的狭いこと
5. 旋律は基本的に旋法上の順次進行によること
6. 旋律に高揚感の感じられる部分のあること
7. 旋律は、比較的短いモチーフからなると共に、リズムパターンの繰り返しもみられること

8. 言葉の語りに近い音色で、養育者自身の声で歌われること
9. 子どものその時々状態・反応に応じた歌いかけが行われること

このような特徴をもつ日本の伝統的な「こもりうた」は「わらべうた」と同様に、日本の歌の最も基本的な構造をもっており、日本語が歌われる際の基本的な特徴を示している。ただし、「こもりうた」は、養育者自身の声で、その子どものために歌われるものであること、子どもの状態や反応に応じた歌い方がされること等が、「わらべうた」とは異なっており、「こもりうた」のきわだった特徴となっている。

表3は、母親（以下、養育者）の子どもに対する言葉かけにみられる特徴が、日本の伝統的な「こもりうた」のどのような音楽的要素と共通しているのか、その関係を示したものである。

表3 子どもに対する養育者の言葉かけにみられる特徴とそこにみられる音楽的要素の関係

子どもに対する養育者の言葉かけにみられる特徴	養育者の言葉かけにみられる音楽的な要素 日本の伝統的な「こもりうた」と共通
大人同士の会話時よりも高いピッチ	基本的に1音節1音
言葉の持つ抑揚に従う、あるいは強調	比較的強い言葉の支配
短い音節群の繰り返しとそれに伴う動作のリズム	言葉がもつリズムとは別の律動感
短いセンテンス	少ない音数、比較的狭い音域
子どもの反応を受けとめた言葉かけ（再発信）	旋律は基本的に順次進行
	旋律から感じられる高揚感
	比較的短いモチーフ
	音やリズムを媒介としたコミュニケーション
	活動（音楽活動に不可欠）

わかりやすくするために、実線、破線、点線、1点鎖線、2点鎖線を用いて、共通するものを線で結んで記した。

このような関係からわかるように、養育者の子どもへの言葉かけは、日本の伝統的な「こもりうた」と共通した音楽的働きをしている。このような音楽的働きを通して、子どもは無意識の内に、日本語が歌われる際の音楽的要素、すなわち、響きやリズム、音の高低、旋律線等を受けとめていくのである。子どもの誕生以後、このような活動が毎日毎日、繰り返し繰り返し、養育者と子どもの間で行われている。このようなプロセスを通して、「こもりうた」にみられる音楽的要素は、子どもの成長・発達の過程で次第に内在化され、同化されていく。それが、その子どもの固有の音楽感覚、すなわち音楽的母語の形成につながっていくのである。子どもの音楽感覚形成の視点から「こもりうた」のもつ意義を整理すると次のようになる。

1. 子どもの音楽的発達の基盤としての機能
2. 子どもと養育者の間で行われる最も親密な音楽的コミュニケーション活動
3. 子どものもつ固有の音楽感覚形成への直接的な関わり
4. 子どもの音楽的ルーツ認識に果たす有効性

「こもりうた」は、人の成長の最も早い時期の音楽的コミュニケーションを形成する存在として意義深いものであり、子どもの音楽的成長を考える上で、「こもりうた」自体が重要な存在であるといえる。つまり、「こもりうた」のもつ音楽教育的な意義は充分認識されなければならない。

学齢期の子どもへの教育が、自分のルーツを認識す

ることに重点を置くとすれば、音楽教育においても、個々の子どものもつ固有の音楽感覚形成の視点から、「こもりうた」について学習する必要があるのではないだろうか。

#### IV. 今後の課題

本研究では「こもりうた」が音楽感覚形成において果たす機能について論じた。今後の課題は、「こもりうた」を起点とする自己の音楽的ルーツを認識する音楽学習について、具体的な方法を開拓していくことである。

#### 【注】

- 1) 音楽的コミュニケーション：音楽的活動を行う者の間で、表現的行為を媒介として相互に行われる知覚・感情・思考の伝達。
- 2) 音楽的母語：ある文化の中で育った者が身につけている潜在的音楽感覚であり、音楽学習を行う上での基盤となるもの。

#### 【引用文献】

- W.S.コンドン：鯨岡峻・和子訳『乳児の呼応性と文化習得』1989
- R.A.クラーク：鯨岡峻・和子訳『活動から身ぶりへの移行』1989
- C.トレヴァーセン：鯨岡峻・和子訳『早期乳幼児期における母子間のコミュニケーションと協応』1989
- M.Mills&E.Melhuish：Recognition of mothers' voice in early infancy.Nature,252,1974

Title : The Music Educational Function of Lullabies for Fostering Children's Musicality

Haruko KATO (Joint Graduate School (Ph.D. Program) in the Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

Shinobu Oku (Faculty of Education, Okayama University)

Abstract : The purpose of this study is to examine the educational function of lullabies to foster musicality from a music education view-point. Lullaby is not only the first musical communication in life stage, but the most intimate musical communication between a baby and his/her care giver. Musical communication is the most important factor for musical development. Therefore, lullabies give a great influence on developing musicality and musical mother tongue which is the foundation of music learning and understanding. It is very necessary to appreciate musical mother tongue of each child, to develop child's musicality on the base of his/her mother tongue from a view-point of music education.

Key Words : musical development, musical communication, musical mother tongue, lullaby, relationship between infant and caregiver

---

